

青年期および成人形成期におけるアイデンティティ発達と社会的比較の関連

人文社会科学専攻心理学プログラム
石崎 和也

問題と目的

青年期において、個人はアイデンティティの形成に取り組み、社会の中で自己の立ち位置を見つけていく (Erikson, 1968)。その過程において、青年はアイデンティティを形成するために、自身がどのような人間であるかを反省的に判断するとともに、他者との比較を通して自己を認識することが必須であると考えられる。本研究では、他者との比較について社会的比較の理論を用いて、アイデンティティ形成について検討することを目的とする。

アイデンティティ形成

アイデンティティ形成について検討するために、本研究ではアイデンティティ発達の5次元モデル (Luyckx et al., 2008) を用いる。5次元モデルはプロセスを2つのコミットメント次元 (コミットメント形成: CM, コミットメントとの同一化: IC) と、2つの前向きな探求次元 (広い探求: EB, 深い探求: ED)、そして不適応的な探求である反芻的探求 (RE) の次元に分ける。また、5つの下位尺度得点の組み合わせからステータスを抽出することができ、DIDS-J (Dimensions of Identity Development Scale: the Japanese version: 中間他, 2015) で見られた達成 (A)、早期完了 (F)、探索モラトリアム (SM)、困難型拡散 (TD) と無問題化型拡散 (CD) が抽出されると予測する。

社会的比較

他者との比較について検討するために、本研究では社会的比較を用いる。社会的比較とは、自分と他者を比較することと定義され、能力比較と意見比較に分けられる (Festinger, 1954)。両者は異なる特徴を持っており (Park & Baek, 2018)、自己の状態や認識によっても比較による影響が異なる (Stapel & Koomen, 2000)。すなわち、発達の時期によって特徴が異なり、その特徴の違いによってアイデンティティ形成に対して発達の時期で異なる関連があると考えられる。

アイデンティティ形成と社会的比較

アイデンティティ形成と社会的比較の関連において発達の時期を考慮した研究は多くない。アイデンティティ・プロセスの3因子モデル (Crocetti et al., 2008) と SNS 上での社会的比較の関連を検討した研究では青年期中期と成人形成期を対象にしている (Noon et

al., 2021)。青年期中期では能力比較において3因子モデルのすべての次元と正の相関が見られた反面、意見比較においてはすべての次元で非有意であった。成人形成期では能力比較、意見比較ともに、次元ごとに関連性が異なっていた。しかし、先行研究ではアイデンティティ形成における不適応的な探求との関連は検討されておらず、ステータスによる検討もされていない。そこで本研究では、青年期前期、青年期中期、成人形成期を対象に DIDS-J を用いてアイデンティティ・プロセスとステータスの両側面からアイデンティティ形成と社会的比較の関連を検討する。

青年期前・中期では能力比較とコミットメント次元、前向きな探求次元は正の関連があり、反芻的探求とは負の関連があると予測する。一方、意見比較は、コミットメント次元と負の関連があり、前向きな探求次元と反芻的探求とは正の関連があると予測する。

成人形成期では能力比較とコミットメント次元は負の関連があり、前向きな探求次元と反芻的探求とは正の関連があると予測する。その一方、意見比較は、コミットメント次元と前向きな探求次元と正の関連があり、反芻的探求とは負の関連があると予測する。

また、アイデンティティ・ステータスについては、青年期前・中期では能力比較の得点が高い人は A に所属しやすく、意見比較の得点が高い人は TD に所属しやすいと予測する。一方、成人形成期では能力比較の得点が高い人は TD に所属しやすく、意見比較の得点が高い人は A に所属しやすいと予測する。

方法

参加者

オンライン上で質問紙調査を実施した。対象者は青年期前期 608 名 (平均年齢 12.7 歳, $SD = 0.4$; 男性 49.8%) と、青年期中期 594 名 (平均年齢 15.8 歳, $SD = 0.4$; 男性 49.7%) と、成人形成期 518 名 (平均年齢 24.7 歳, $SD = 3.3$; 男性 53.9%) であった。

質問紙構成

アイデンティティ 中間他 (2015) の DIDS-J を用いた。CM ($\alpha = .90$) と IC ($\alpha = .87$)、EB ($\alpha = .92$)、ED ($\alpha = .81$)、RE ($\alpha = .83$) の5つの下位尺度からなり、各5項目の25項目で構成されている。回答は5件法で求めた。

社会的比較 外山 (2002) の社会的比較志向性尺度を用いた。原版の Social Comparison Orientation (Gibbons & Buunk, 1999) と一部因子構造が異なるため、探索的因子分析 (最尤法, オブリミン回転) を行い、能力比較と意見比較の2つの下位尺度からなる、能力比較6項目 ($\alpha = .85$), 意見比較4項目 ($\alpha = .81$) で以降の分析を行った。回答は5件法で求めた。

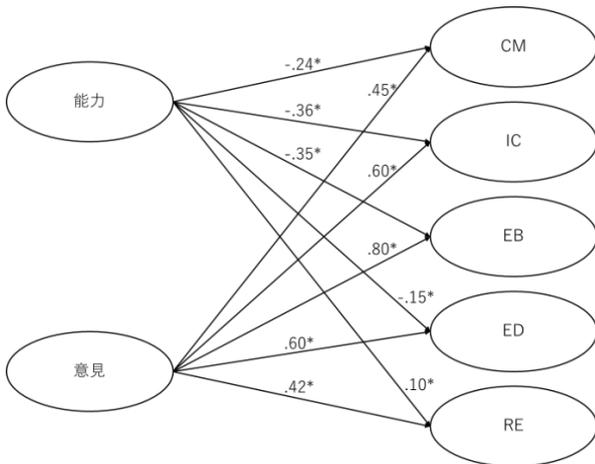
結果

アイデンティティ・プロセスと社会的比較の関連

アイデンティティ・プロセスの5次元と社会的比較の能力比較と意見比較の関連を、パス解析 (最尤法) によって検討した (Figure 1)。モデルの適合度は $\chi^2(149) = 1784.37$, CFI = .93, RMSEA = .08 で十分だった。

発達の時期に応じて変数間の関連が異なるかについて検討するために、多母集団同時分析を行った。パスが等値であるように制約されたモデルと、制約を設けないモデルを比較した結果、モデル間に有意差は見られなかった ($\Delta CFI = .00$, $\Delta RMSEA = .00$)。つまり、アイデンティティ・プロセスから社会的比較への関連において発達の時期の違いは見られなかった。

Figure 1
アイデンティティ・プロセスと社会的比較の関連



注) 表記のパス係数は標準化偏回帰係数。
* $p < .05$

アイデンティティ・ステイタスと社会的比較の関連

DIDS-J の5つの下位尺度得点を用いて、潜在プロファイル分析を行った。その結果、F (584名, 34.0%), SM (470名, 27.3%), TD (218名, 12.7%), CD (448名, 26.0%) の4クラスが抽出された。

各アイデンティティ・ステイタスと社会的比較の能力比較と意見比較の関連を、多項ロジスティック回帰分析によって検討した (Table 1)。

発達の時期に応じて関連が異なるかについて検討するために、それぞれの年代で多項ロジスティック回帰分析を行った。しかし、各ステイタスと社会的比較の関連に年代による違いが見られなかったため、全体の

データを報告した。

考察

アイデンティティ・プロセスと社会的比較

アイデンティティ・プロセスと社会的比較の関連について、能力比較、意見比較のそれぞれで発達の時期に応じて関連が異なると予測した。結果は、発達の時期に応じて関連は異ならず、能力比較はコミットメント次元と前向きな探求次元に負の関連、反芻的探求とは正の関連があり、意見比較はすべての次元と正の関連があり、仮説は一部支持された。意見比較は反芻的探求と正の関連を示しており、アイデンティティ形成を促進するが、不適応的な心理状態に陥る可能性も考えられる。今後は意見比較がアイデンティティ形成に与える影響を慎重に検討していく必要があるだろう。

アイデンティティ・ステイタスと社会的比較

アイデンティティ・ステイタスと社会的比較の関連について、能力比較、意見比較のそれぞれで発達の時期に応じて所属のしやすさが異なると予測した。結果は発達の時期に応じた違いは見られず、能力比較の得点が高い人はTDやCDに所属しやすく、意見比較の得点が高い人は、SMやTDに所属しやすく仮説は一部支持された。これらのことから、能力比較は拡散のステイタスになりやすく、意見比較は探求を積極的に行うステイタスになりやすいことが考えられる。能力比較を行うことで、自身のアイデンティティについて迷いや問い直しが起こる可能性が考えられる。一方、意見比較を行うことで、自身のアイデンティティについて問い直す青年もいるが、現在のアイデンティティを保持しつつ、新たな可能性を探求する青年もいると考えられる。

総合考察

本研究ではアイデンティティ形成と社会的比較の関連について検討した。発達の時期によらず、能力比較はアイデンティティ形成を抑制し、意見比較は概ねアイデンティティ形成を促進することを明らかにした。今後は社会的比較による影響を理解するために、年代による区別以外にも、自己をどのようにとらえているかについて考慮に入れた研究が必要だと考える。

Table 1
アイデンティティ・ステイタスと社会的比較の関連

ステイタス	参照ステイタス	オッズ比 [95% CI]	
		能力比較	意見比較
F	SM	1.38* [1.14, 1.65]	0.30* [0.25, 0.37]
	TD	0.79 [0.63, 1.00]	0.37* [0.29, 0.48]
	CD	0.79* [0.66, 0.94]	2.09* [1.72, 2.54]
SM	TD	0.58* [0.46, 0.73]	1.25 [0.98, 1.59]
	CD	0.57* [0.46, 0.70]	6.97* [5.51, 8.82]
TD	CD	0.00 [0.77, 1.27]	5.59* [4.25, 7.34]

* $p < .05$

(主任指導教員: 杉村 和夫)

副指導教員: 梅村 比丘・坂田 桐子)